

巻頭言

土地改良とともに四十年

株式会社北陽 代表取締役会長 大久保 憲一



土地改良一筋の企業に転職、代表取締役として経営に携わり四十年が過ぎた。転職早々に直面したのは、岡部三郎先生を支援した最後の参議院全国区の選挙でした。一六万二、〇〇三票獲得。第八位で当選された。上位七名は著名人タレントで実質的にはトップ当選。土地改良とは一体何物。不思議な世界でした。

その後、産官学のさまざまな方々から親しくご交誼ご鞭撻をいただくとともに、土地改良についても多大なご教示を賜った。

歴史を学び今があり、そして未来がある

土地改良の歴史は「古代条里制」「鎌倉時代の二毛作の普及」「戦国時代から江戸初期の新田開発」「明治時代の開拓、疏水、耕地整理」に分類でき、いずれも国家として土地制度の確立や食糧増産の基礎となってきた。

では「土地改良」という用語はいつから認識されたのか。

明治三十二年に耕地整理法が制定され、当初同法は区画の形状変更が主で、水の問題には重点が置かれていなかった。明治三十五年に上野英三郎先生・有働良夫氏合著により発行された『土地改良論』は灌漑論・排水論の二編で構成され、著者は、耕地整理、土地改良の用語を別のもので使用していたが、本書の終章にて、それは一体であるべきと示唆しており、これが昭和二十四年の土地改良法

制定にあたり「土地と水の総合的な改良」の基調となったと考えられる。また土地改良を支える技術である農業土木学は、東京農林大学が東京帝国大学に継承され、明治三十三年に上野先生により初めて講義されている。これらの経緯を踏まえ、土地改良が法的根拠を持ち、同時に「ムラ」であった農村の水利組合等の任意組織が土地改良区に整理された。同法は、時代の変遷とともに十七回の改正を経て、現在の土地改良事業が実施されている。

戦後昭和四十年代まで、日本の米は不足しており、灌漑・開拓・干拓による食糧増産が土地改良の大きな使命であった。

現在、農業の担い手不足、高齢化が深刻。いかに効率的に食料の生産性を上げていき、生産コストの低減、高収益作物の導入、所得の向上、若い担い手が夢を持てる農業が問われている。

農地の集積、大区画化、水田の汎用化、排水改良など課題は多いが、まずは先人の努力で築かれた各地の土地改良施設を守りつつ、今後も技術革新を通じて、常に社会の変化に合わせ、課題に応じていくことが次世代への贈り物と考えている。

未来、四十年後の景色を私は見ることはできないが、農業と地域の営み、そして周囲の環境と人々との調和を強く意識することにより、土地改良が日本にとって最も重要であり続けることは変わらなると確信している。